

我が日本民族をキリストへ

日本民族総福音化運動協議会

Movement of Evangelizing All Japanese

第49号

リバイバルの鍵は

「ディボーション」とその「分かち合い」



保守バプテスト同盟
市ヶ尾キリスト教会 牧師
評議委員・元理事
鮫島 紘一

日本民族総福音化運動協議会の主催で二〇一九年6月に持たれた台湾教会の視察ツアーに参加しました。台湾では近年、教会が急成長しており、大きなリバイバルが起こっています。ツアーでは、南部の高雄から始まり、台南、台中、台北と台湾を縦断する形で、急成長している12の教会を訪問し、それぞれの教会の主任牧師から、教会がリバイバルに至った経緯について説明を受けました。

実際に現地の教会を訪問して一番印象的だったのは、教会に大勢集まる若者たちの姿でした。主任牧師も早い時期に若い牧師にバトンタッチされているので、ささげられる礼拝も若い牧師でないといけないような早いテンポの、まさに若者向けのスタイルでした。

そして、成長する教会に共通して

見られた特徴は、小グループの取り組みでした。教会が成長していく中で、7、8人単位の小グループが教会ごとに二〇〇、三〇〇と増殖して、各グループにリーダーが立てられていきます。そうして、リーダーの養成が、教会を挙げて弟子訓練として進められていくのです。さながら、初代教会の家の教会のようでした。

日本の教会がリバイバルする鍵は何か。大きくリバイバルする台湾の教会を視察しながら、私は、信徒たちの平日の過ごし方に注目しました。それが、「ディボーション」とその「分かち合い」です。

訪問したどの教会も、日曜日の礼拝は新しく来た人を迎えることに重点を置いていました。その代わりに、平日には教会員がそれぞれ毎日、共通のテキストを使って聖書の御言葉

にしっかり向き合っています。それだけでなく、よく集まって、同じ御言葉から受けた恵みを分かち合う時間を持つていました。

ディボーションは、主との交わりです。日々主の御声を聞くことは、私たちの信仰生活において最も重要なことです。それは、私たちの信仰が単なる形式的な宗教になるか、まことの永遠のいのちを生きるものになるかの分かれ目だからです。主の御声を聞く方法にもさまざまなものがあります。その中で最も安全で確実な方法は、聖書の御言葉を通して、聖霊なる神様の語る御声を聞くことです。

「助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したす

すべてのことを思い起こさせてくださいます」(ヨハネの福音書14章26節)

古い罪の性質の奴隷から私たちを解き放ち、いのちの道へと導いてくださるのは、私たちの助け主である聖霊ご自身です。いずれの教会でも異口同音に強調されたことは、教会の成長と祝福は、ただ聖霊様の働きによるといふことでした。信徒一人一人が毎日、個人的に御言葉に向き合う時間はどれほど尊いでしょうか。

デイボーションには大切な原則があります。まずは、父なる神、子なるイエス、聖霊なる神のご臨在を認め、この方に礼拝と賛美をささげることです。そうして、神様が私の心を開いて御言葉を悟らせてくださるように祈ります。

次に、静聴です。神様が語ってくださることを期待して、御言葉をゆっくり、注意深く読みます。神様の御言葉は、読みながら聞くものです。読みながら、聖霊様の御声に耳を傾けます。そして、聖霊様に御言葉を照らしていただき、聖書全体を観察しながら、教えられたことを黙想し、書き出していきます。まず、読んだ聖書の内容を簡単にまとめます。御言葉の内容と全体の輪郭、主題などを把握し、全体の意味を捉えます。そして、御言葉の中で、神様がご自身をどのように現しておられるかを黙想します。イエス様は「永遠のいのちとは、唯一のまことの神であるあなたと、あな

たの遣わされたイエス・キリストとを知ることです」とおっしゃいました。

私たちの信じている神様がどのようなお方なのかを知ることこそ、信仰の成長につながります。さらに、神様が与えてくださる教えを聞いていきます。神様は御言葉を通して具体的に、命令や警告、慰めや励ましを与えてくださいます。これらはすべて、私たちが御言葉を思い巡らし、黙想する中で、聖霊様が自ら教えてくださるものです。

「聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです」(IIテモテ3章16〜17節)

私は神様の御声を聞くために、次の5つの頭文字を取って「SPACE」という質問形式の方法を用いています。①示された罪 (Sins to confess) はないか、②神様からの約束や慰め (Promises to claim) はないか、③避けるべき行動 (Action to avoid) はないか、④従うべき命令 (Commands to obey) はないか、⑤ついで行くべき模範 (Examples to follow) はないか。

最後は適用です。与えられた御言葉を吟味し、具体的に自分の生活にどう適用すべきか、悟らせてくださいと祈ります。御言葉が与えられた

ということは、神様が生活の中でそれを適用し、実践するように願う部分があるということです。ですからそれを信じ、もう一步主との深い交わりを通して、主が目を開いてくださるように祈ります。御言葉を通して示された神様の祝福、約束、慰めなどに対しては、感謝と賛美の祈りをささげます。また、戒めと警告に対しては、具体的に悔い改めの祈りをささげます。御心が分らないときは、その部分を具体的に神様に聞きながら、神様と対話します。そして、神様の御声に対して、従順の祈りをささげます。神様の御言葉は、私たちの知識のために与えられたものではなく、私たちの人生と生活のために与えられたものです。ですから、今日実践すべきことを具体的に書き留め

ます。優先順位を決め、出て行つて実践します。

その日の終わりに、デイボーションで示されたことを実践した結果、体験した出来事を振り返り、神様の素晴らしさを黙想して感謝をささげます。うまくいかなかったことにも感謝をささげます。そのようにして一日の感謝を書き留めます。

ある教会では、日本でも普及しているデイボーション誌「リビングライフ」を信徒約3千人が定期購読していました。日本には素晴らしいデイボーション用の雑誌が幾つも普及しています。それらが豊かに用いられ、個人でのデイボーションはもちろん、グループで恵みを分かち合う運動が広がり、日本に大きなリバイバルが起ることを期待します。



2024 Jesus June Festival Report

リバイバルは、

これからではなく、 すでに来ている！



ジーザス・ジューン・フェスティバル
実行委員長 菅野 直基

6月10日、今年も、「ジーザス・ジューン・フェスティバル2024」を、東京都新宿区の東京中央教会（韓国系単立）を会場にて開催しました。メディア関係者を含めて、50名が参加され、オンラインでも数人の方々がアクセスしてくださいました。

実行委員長の菅野直基牧師（新宿福興教会）は冒頭であいさつをし、「今まさに、リバイバルが来ている！ 私た



講演・有賀喜一師

よって私は救われました」と語り、自ら歌を披露されました。最初にスペイン語で歌い、つづいて中国語、韓国語などでも歌われました。続いて有賀師は、聖書を開き、イザヤ書60章1節の聖句を読みました。「起きよ。光を放て。あなたの光が来て、主の栄光があなたの上に輝いているからだ。」

ちも心燃やされ、立ち上がり、リバイバルのために用いられていくようではありませんか！とすすめるながら、60年以上の長きに渡って現役の伝道者として活躍する有賀喜一牧師を講壇に迎えました。

講師登壇前には3曲の会衆賛美をしましたが、有賀師はその3曲目に歌った「輝く日を仰ぐ時」を、自らの救いの証と共に、「この賛美歌に

リスチャン一人一人から始まるのであり、一つの教会から始まる。そして、リバイバルはあなたから始まる」と強調されました。

有賀師は、仏教の禅宗・曹洞宗に熱心な家庭に生まれ育ち、その中から奇跡的に救われただけではなく、家族全員が救われ、がんにかかった父親もいやされた証をしながら、「リバイバルは、これから来るのではなく、すでに始まり、与えられているの

です。あなたの人生においても同じです。そのリバイバルを受け取りましょう。どんな暗闇があっても、また戦いがあっても、主の輝きによって暗闇は消えていくのです」と締め括られました。講演を聞いた参加者たちは、心燃やされ、御言葉に応答して日本のリバイバルのために祈りをささげました。

事務局長の行澤一人牧師（レハイム・キリスト教会）は、有賀牧師の講演を受けて「リバイバルを受け取り、輝かせていくことが私たちの責任です。このリバイバルが日本中に広がって行きますように」と語り、「この働きを行っている日本民族総福音化協議会にご賛同をお願いします」と参加を呼びかけました。日本民族総福音化運動協議会は、多くの日本の若者たちが将来への希望を見い出せない状況を憂え、キリスト教信仰こそが日本の国と民族を再建する鍵となることを確信し、二〇〇三年に超教派の有志によって結成されました。日本のリバイバルを求める一三五〇人の賛同者や複数の団体と協力し、全国規模で活動を展開しています。ジーザス・ジューン・フェスティバルは、同協議会が毎年6月に開催している集まりであり、今年で20回目を迎えました。

ご参加くださった方々、また背後でお祈りくださった方々、ありがとうございました。

連載
第4回

わたしの日本宣教論

徒然草

聖書と日本フォーラム
仙台館(やかた)家の教会会員

佐藤 博

死を賭して

「架け橋」となった日系人

「架け橋」の意味

『われ太平洋の橋とならん』と語ったのは「武士道 Bushido: The Soul of Japan」を著した、新渡戸稲造です。橋の対岸を「アメリカ」とすれば、此岸は「日本」です。アメリカ人に日本人を理解してもらい、その「架け橋」となるには両端はそれぞれの地にしっかりと固定されなければなりません。英語で書いたのはその為です。それが日本人キリスト者の執りうる唯一の「立ち位置」ではなかったでしょうか。

ではイエス・キリストの場合はどうでしょう。イエスは父なる神と人との「架け橋」、天から地に向けて立てられた「生けるはしご」(創世記28章10〜12節)となりました。イエスは「真の神」とあると同時に、「真の人」だったからです。

神が人になったという、この史実にそ史上最大の「遜り」であり、その予型です(ピリピ2章5〜11節)。

ジャパニーズ・

アメリカンズという

「架け橋」

新渡戸稲造の他にも「太平洋の架け橋」となった人々がいました。

戦前米国に渡った一世移民の子弟、日系二世のジャパニーズ・アメリカンズたちです。アメリカ陸軍の歩兵部隊、通称「四四二連隊」の約六千人の若者たちです。彼らはヨーロッパ戦線に派遣されました。自分の為に行った訳ではありません。それが自分たちの負うべき十字架への道であると、心得ていたのです。

連合軍の先鋒となり真っ先にドイツ領まで進攻し、ユダヤ人収容所を

ナチスの手から解放したのは白人のエリート部隊ではなく、彼ら「四四二連隊」だったのです。

武士道に生き、武士道に死ぬほか還る術なき英語を話す日系兵士たち、それがジャパニーズ・アメリカンズだったのです。

ユダヤ人とアメリカ人を

救出した二世部隊

彼らは今から約八十年前のアメリカ陸軍に於いて、日系二世たちだけで編制されました。移民国家のアメリカに於いて一つの民族だけで構成された部隊は、彼らが始めてです。

当時は人種差別と敵性移民である事の故に厄介者として扱われ、指揮下に入れてもらう事も許されなかった時代です。平均的アメリカ兵と比べ、体躯に劣る日系人ですから足手まといになると思われたのです。志願兵募集の窓口でさえ、「ジャップはお断り」という有様でした。それにもめげず再三再四の要求の末、後方任務なら受け入れ可能という話になりました。それは道路整備や兵舎の建設などをする、非戦闘部隊です。

しかし彼らは戦う事でしか証明できないアメリカに対する「忠誠心」と、市民権すら与えられない一世たちの「名譽」の回復と、今後アメリカ社会で生きていかねばならない三世以降の「将来」の事を考えた末、敢えて苦渋の選択をしたのです。それが彼らの選択すべき三位一体だったの

です。或る帰還兵は、『あの時志願しなれば今頃は日本とアメリカの間を漂う根無し草になっていた、我々は死んでも忠誠心を証明しなければならなかった、そうでもしなければ子供たちは頭を上げて外を歩く事もできない』と語ったのです。

彼らは、死傷率三二〇%を超えてまで戦いました。消耗品として扱われるのは承知の上です。それが自分たちの負うべき十字架である事をわきまえていたのです。その時代に生まれたが故に、否が応でもその渦中に駆り出された人々の生死から眼を背け、「手軽に反戦平和」を唱和するような不遜があつてはならないと思います。

アメリカ陸軍上層部の軍政的判断に於いても日系部隊の獅子奮迅ばかりがスクープされたとなつては全軍の統率に示しが付かないと思われ、幾多の手柄さえ白人部隊の手柄として報道される始末です。因みにローマを解放したのも二世部隊だったのですが、解放軍として最初に入城を許されたのは、白人部隊の方でした。

背中合わせの

「日本人とユダヤ人」

彼らはイタリア・フランス最前線を股にかけ、とうとうドイツ領にまで進攻し、ダッハウのユダヤ人収容所をナチスの手からも奪還したのです。そこは三万二千人を超す死を待

つだけのダビデの末裔が收容されていた、人間の最終処分場でした。中にはリトアニア大使の杉原千畝のビザにより、一度助けられたユダヤ人まで收容されていたとの事です。「日本人と日系人」は知ってか知らずか自分たちの命と引き替えに、ユダヤ人を二度にわたり救出したという話になりそうです。欧米すべてのキリスト教会はもとより、『神は愛なり』を宣もう宗教団体ですら指一本貸そうとはしなかったユダヤ人への救出劇です。当時はドイツとの三国同盟下にあったのが日本です。その「日本人と日系人」がトンデモナイ時にトンデモナイ所に突然現れ何故に自分たちを助けてくれるのか、当のユダヤ人たちでさえ理解を超えるものでした(詩篇118篇23節)。歴史のいたずらという事にして、片付く話でしょうか。

イエローモンキーと

擲擧された二世部隊

しかしその時助けに来た日系兵士の家族たちは、土地や財産を二束三文で処分せられ銀行預金も凍結の挙句、自動小銃で武装したアメリカ陸軍の歩哨が監視する鉄条網の中に收容されていたのです。收容された人々には番号が付され、呼び出される時は名前ではなく登録番号です。キャンプ地とは名ばかりの日系人強制收容所です。ダッハウとの違いと言えば、ガス室の有無だけという有様です。

重ねて言及すればアメリカ陸軍のシンボルともいえる名門の第一大隊、別名「テキサス大隊」が全滅しかけた時の話です。そのルーツを「アラモの砦」にまでさかのぼる事ができるアメリカ陸軍きつての精鋭部隊です。アメリカ人の発想によるナンバリング、「第一大隊」という部隊名がその証です。

なんという皮肉かそのエリート部隊こそ、かつて二世部隊を役立たずのイエローモンキーと擲擧しジャップと嘲った因縁の部隊だったのです。因みに、四四二という三桁数字の部隊ナンバ―とは「役立たず」の意味であり、そういう類の隠語なのです。

ドイツ軍は進退窮まったそんなテキサンたちを餌にして罠を仕掛け、ここぞとばかりの反攻手段とすべく、手ぐすねを引いて待ち構えていたのです。それは当時世界最強という折り紙付きのティーガー戦車まで総動員した鉄壁の布陣でした。

この時、大統領フランクリン・ルーズベルトが直々に発した命令、『いかなる犠牲を払ってでもテキサス大隊を救出せよ』という電文が現地司令部に届きました。その時に招集されたのは休暇を終え準備万端整った白人部隊ではなく、ろくな休息も与えられないまま酷使され続けた日系二世部隊、四四二連隊の歩兵たちだったのです。

二個師団規模のアメリカ陸軍正規部隊、二万人が半年かけても攻略で



第442歩兵連隊旗

きなかったゴシックライン、即ちドイツ軍最後の防衛線を32分で突破した四四二の兵士たちは本物でした。今や彼らの忠誠心を疑う軍人は、アメリカ陸軍の將軍たちの中には一人もいなくなりました。当初は「失われた部隊」と全米各地に報道されたテキサス大隊、しかし、その残存兵二百十一名を救出する為に「失われた日系部隊」の数は八百名を超えたのです。

マーク・クラーク將軍の事

また、四四二連隊の忠誠心に刮目し、戦う前からそのファイティングスピリットに期待していた「ユダヤ系」アメリカ人、マーク・クラーク將軍がいました。何故か当時のアメリカ人には珍しく、日系人に対する偏見は殆どなかったとの事です。彼は自分の勲章の為に日系二世部隊を利用しませんでした。兵隊たちもそんな將軍を信頼し彼の指揮下で戦う事を望んだそうです。

日系兵士たちからは常に肩から頭一つ分だけ背の高いナイスガイです(「Iサムエル9章1〜2、15〜17節」。四四二連隊の兵士たちの平均身長は5フィート3インチ(160センチメートル)です。それに比べてマーク・クラーク將軍は2メートルに届く背丈です。

閱兵式で並んだ姿はまるで競馬の騎手たちを見下ろすプロバスケッ卜ボールの選手かと見紛う程です。イスラエル王国の初代の王様、ベニヤミン族出身の若き日のサウル王を彷彿させる姿です。

英語と日本語をチャンポンに奇声を発し弾雨の中を突撃して来る小柄で敏捷な東洋人を始めて見たドイツ兵たちはゾンビかと怖じ惑い、武器を放棄しての敗走場面も度々あったとの事です。

しかし彼らは蛮勇と、特異な筋肉に裏打ちされたゾンビでもなく、自殺アタックより他に能がない者たちではありません。己が命に優る目的の為ならば、死をも厭わぬ『Go for Broke』です。『撃ちてしまん、当たって砕けろ!』の二世部隊です。彼らのシンボルは肩章に縫い付けられ



第442連隊戦闘団
フリーダムトーチ 部隊章

た「燃えるたいまつ」(創世記15章17節)や「Red Bull」だった。野牛の角を持った「赤い牛」が目印です。

聖書曰く、「ヨセフについて言った。主の祝福が、彼の地にあるように。彼の牛の初子には威厳があり、その角は野牛の角。これをもつて地の果て果てまで、国々の民をことごとく突き倒していく。このような者がエフライムに幾万、このような者がマナセに幾千もいる」(申命記33章13～17節)。

最後の閱兵式

昭和21年(1946年)7月15日、首都ワシントンにて帰還兵のパレードが小雨降りしきる中で行われました。沿道は6千人を超す人々で埋まりました。トルーマン大統領は四四二連隊の歩兵たちを前に、アメリカを代表して語りました。『諸君は敵だけでなく、偏見(人種差別)とも戦い、そして勝ったのだ』と。

アメリカ人からは疎まれ、そのアメリカへの忠誠心を身をもって証明する為に死地に赴いて行った兵士たち、捨て駒になる事を厭わなかった歩兵たち、日本人のアイデンティティに全てを託し戦ったジャパニーズ・アメリカンズとは「太平洋」ばかりではなく、「大西洋」への『架け橋』でもあったとすれば、トルーマンの訓示は『日本と日本人』の何を意味していたのでしょうか。

完

重要なお知らせ

賛同者の皆様へ

本会総裁であった手束正昭師の召天に伴い、本会を代表する者が不在の状態であることに対処するため、本年6月に評議委員会において左記のような規約改正を実施しました(第19条の2の新設)。これを受けて、規約19条の2第4項により、2025年6月の定期評議委員会まで新総裁の選出を延期し、また同条第1項・2項により、書記であった行澤一人理事が総裁職務代行者に就くことを承認しました。お知らせが遅れましたことをお詫び申し上げます。なお、来年度6月の定期評議委員会において総裁選挙を実施し、新総裁を選出する予定です。皆様には、お祈りくださいますようお願いいたします。

第19条の2 総裁が任期の途中で職務を果たすことができなくなった場合、総裁は、理事の中から総裁の職務を代行する者を任命することができる。

2 総裁が任期途中で死去した場合、副総裁、書記または会計監査である理事が、当該順位に従って総裁の職務代行者となるべく決定されるものとする。この場合、職務代行者の決定は、会報誌その他相当と思われる方法をもって賛同者に通知されなければならない。

3 総裁の職務代行者の権限は規約17条に定めるところに拠るものとし、6条6項(評議委員の推薦権限)、12条2項(理事の推薦権限)及び22条1項(事務局長指名権限)による権限を行使することはできない。

4 総裁が任期途中で死去した場合、直近の定例評議会において、規約18条1項により新総裁を選出しなければならない。ただし、相当と思われる場合には、当該評議委員会の議決により、直近の評議委員会の翌年度の評議委員会まで新総裁の選出を延期することができる。

日本民族総福音化運動協議会趣意書

醒めよ日本！
起こせキリストによる精神革命

大いなる主の御名を崇めます。

現在私達の国、日本は大きな危機の中に置かれています。それは決して経済の危機ではありません。精神の危機であります。その兆候を私達は端的に子供達、若者達の中に見ることができます。暗く沈み、眼の輝きの失せた、子供達、若者達の中に、明日の日本の希望を見つけることはできません。日本は確実に衰退の方向に進んでいます。そしてこのような祖国の危機的状況を救うのは、実にキリストによる精神革命以外にありません。今こそ、私達日本のクリスチャンが、教派、教団の壁を乗り越え、教理、神学の枠を乗り越え、日本の救いのために立ち上がることが求められています。

私達はこのような危機意識の下に決起し、2003年6月に「日本民族総福音化運動協議会」を立ち上げました。この運動がわざわざ“日本民族”と銘打ったのは、日本の国と民族をキリスト教信仰によって再建しようと強く意識したことにより、それ故に日本の歴史・文化・伝統に文化適応した福音の提示を積極的になしていきたいと願っているからに他なりません。

しかもこの運動は文字通り超教派的運動であり、「イエスは主、我等の救い主」と告白する者ならば、誰でも参加することができるもので、決して神学や信条を問いません。更にこの運動は、これ迄日本のリバイバルを求める団体と競合するものではなく、むしろ、既に日本において起こされていた日本のリバイバルを求め、日本の救いを求めてきた諸団体や個人との良き協力関係の中で押し進めて行かなくてはならないと考えております。その意味で、これ迄日本のリバイバルや救いを求めてこられた方々の積極的な協力と参加をも心より願う次第です。

以上の趣旨をご理解の上、是非とも、この運動にご参加下さい。共に、日本の救いのために立ち上がって参りましょう。

日本民族総福音化運動協議会

Committee of 'Movement of Evangelizing All Japanese'

'Awake, Japan! Let the Spiritual Revolution in Christ Break out !'

Praise the Great Name of the Lord!

Today, our nation Japan is facing the deep crisis. It is not just economic problem, but rather the crisis of spirit. We clearly see the symptom of it in the younger generation or even children. In their eyes we could not see the shining light or hopeful delight, so we could hardly hope for the tomorrow of this nation. Definitely we could not help saying that this nation is declining. And we are absolutely convinced that this nation shall not be delivered from such national crisis other than through the spiritual revolution in Christ. Now is the time when all Japanese Christians should stand up in unity for salvation of our nation, regardless of all differences among our denominations or organizations, with all effort of getting over the differences in theologies or teachings.

We stood up and inaugurated this 'Movement of Evangelizing all Japanese' in June, 2003 with such passion for this nation. The reason why we emphasize 'all Japanese' in the title of this movement is that we intentionally share the hope of restoration of Japan as a whole nation through Christian faith and the desire of positively developing the mission of gospel contextualized in our own Japanese history, culture and tradition.

In addition, we aim literally inter-denominational movement and welcome anyone joining us whoever confess 'Jesus is the Lord, our Messiah ' without asking any definite theology or creed. Moreover, we say, we do not have any intention of competing with other organizations or movements with special purpose of Japanese revival, but rather we would like to proceed in good co-operation with any organization or individual that has ever been much contributing to the Japanese revival and salvation. In that sense, we also appreciate very much for positive co-operation with us and wide engagement in our movement by such organizations or individuals that have been acting with aiming for Japanese revival.

So, we humbly beg your engagement in our movement with understanding our purpose.

Let us stand up together for the salvation of our nation Japan.